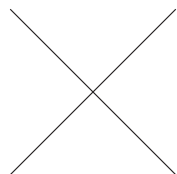


特集

農



市民活動 で 広がる 可能性

都市は生活環境悪化や人間関係の希薄化が進み、農産地は過疎や耕作放棄地増加の課題を抱えている。食料自給率の長期的低下傾向も気になるところだ。「農」に市民活動が関わることで、どんな可能性が広がるか。持続可能な農をどう支えられるのか、考えたい。

【特集チーム】

稲田千紘、鹿住貴之、掃部郁子、
永井美佳、増田宏幸、百瀬真友美



週末、はじめて農に触れる。

丹波篠山旅。

体験！農業ボランティア

兵庫県の丹波篠山^{たんばささやま}をフィールドに研究活動をしている清水夏樹先生（8ページに談話）を頼って、初めての農業ボランティアへと出かけた。生まれも育ちも都会。遠足で芋ほりに出かけたのが、最後に土に触った思い出だろうか。そんな私が、農^{のう}に関心を持ったのは、新型コロナウイルスの感染拡大で都市のもろさを知り、都市中心の生活スタイルに違和感が生まれたからだ。そして実際、価値観も都市に偏っていたことに気づかされる旅となった。

農業ボランティアと就農

朝10時、電車で片道2時間ほど揺られて着いた丹波篠山。先生は車の運転が得意な私を駅まで迎えにきてくださった。

午前中は、地域おこし協力隊（注1）になり今年の4月から就農した杉田かなえさんの元を訪れた。あいさつを済ませると早速、収穫が終わった畑のマルチ

（注2）を剥がす作業に取り掛かることになった。「左右に止めてあるピンを全て外して、端からマルチを剥がしてください」。畑作業と言えば、くわで土を耕したり、作物を収穫したりするものだと思っていたため、収穫が終わってからの後片付けをしたことが新鮮だった。

畑には私たちの他に、神戸大学の農業ボランティアサークルA.G.L.O.C^{アグロロック}の高野愛さんが先にいた。農学部に進学したが、授業は座学が中心であるため、サークルで実際の農業に触れているらしい。高野さんは「毎回お土産に野菜をもらってしまっ、ボランティアになっているのかと思うこともあります」と笑って話してくれた。

2時間ほど作業をして、休憩中に杉田さんにボランティアを受けられている理由を聞くことができた。「1人でやっているものだから、月に1、2回でも手伝いがあると思う助かるんです。私も大学の頃に農業ボランティアに行って楽しくて、今ご縁があって丹波篠山で農業を始めています。だから、自分のところに来てくれるボランティアにも楽しみを



右上／杉田さん 右下／マルチ剥がし
中上／黒豆の畑 中下／葉を取っている筆者
左上／葉を取る前 左下／葉を取った後



提供したいなという気持ちがあります」
帰り際に収穫したてのカブをいただいた。遠慮する様子をみて先生が「それも農業ボランティアの醍醐味ですよ」と言っていた。

丹波篠山名物の黒豆の葉取り

正午になり、お昼ご飯は先生が行きつけの店で食べた。丹波篠山は農地と住宅街、観光スポットがそれほど離れていない場所に集まっているので、農作業をしてすぐにおしゃれなお店でランチを楽しむことができる。

午後は別の地区の農家を訪れた。仕事は丹波篠山名物である黒豆の、収穫前のひと作業だ。黒豆は実が大きくなってから、余計な葉を取り、風にさらし乾燥させたあと根元を切って収穫する。葉の付き方は多様なため、人の手で取るしかない。

葉のついている枝の根元は膨らんでいて、それを下方向に曲げると、パキッと取れる。文字にすると簡単だが、豆と葉は色が同じで、間違つて豆の方を取ってしまったわけではない緊張した。「人が大切に育てた作物。失敗するわけにはいかない」。きれいな景色とは裏腹に、肩に力がいっぱいだった。

しばらくするとコーヒーをいただき、

畑の縁に座っておしゃべりした。「1人で農作業するのは気楽でいいよ。疲れたら休めばいい。無理なら耕す面積を減らせばいい」。人が減ると作業も減るのが当たり前なのに、会社勤めではそうはいかない。人手が減ると1人の作業量が増えるという思ってしまう。

15時、時間を知らせる音楽が鳴り響き、作業は終わった。農業ボランティアは、農業バイトや農業体験とは違い、農家の人と上下関係や顧客関係なく共に同じ時間を過ごせることが魅力の一つである。気持ちのいい空の下でたわいもない話ができただけは良い思い出。午後には訪ねた農家は普段ボランティアを受け入れているわけではない。私のことは孫が手伝いにくる感覚だったそう。

想像するに、この地域では家族や地域の人が農作業を手伝っても、わざわざボランティアとは言わないだろう。それは助け合いであって、「ボランティア」と呼ぶのは他人行儀な印象がある。農業とボランティアの言葉が結びつくのは、農業を「外側」と認識している都会的な考え方なのではないかと考えた。助け合いの中で暮らす農村では、都市で飛び交う「農業ボランティア」の言葉を、どう解釈しているのだろうか。

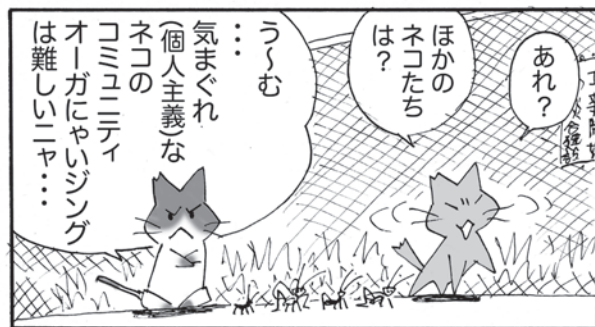
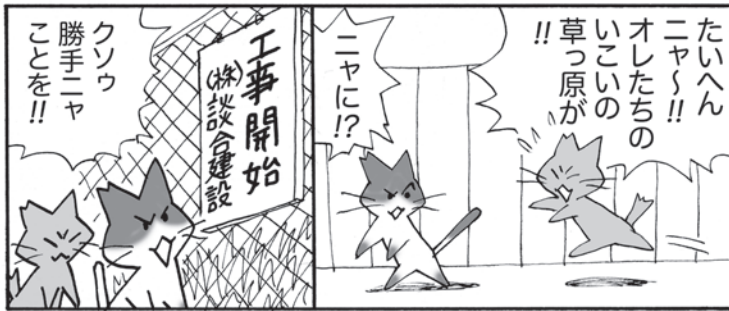
編集委員 稲田千紘

(注1) 移住者が「地域おこし協力隊員」としてさまざまな地域活動に携わりその地域への定住・定着を検討する、国の政策。(注2) 作物が生えている土部分を覆うフィルムのこと。雑草の抑制や土壌水分の蒸発を防ぐ効果がある。

うお3君の 気にな〜る ゼミナール

Vol.
121

「コミュニティオーガナイズ ング」って？



まんが ■ ラッキー植松

コミュニティオーガナイズング（以下、CO）とは、公衆衛生、社会福祉、教育、労働問題など幅広い社会問題を解決するために、地域住民を組織化し、社会運動につなげる活動のことである。

バラク・オバマ元米国大統領が、シカゴの黒人貧民街でコミュニティ・オーガナイザーとして働いていたことを自伝の中で明らかにし、2008年の大統領選挙期間中に多くのメディアで取り上げられたことでCOが注目されることとなった。

同じく「組織化」で連想されるネットワーキングとの大きな違いは、社会の周辺に追いやられている人々の「権利」や「資源」を獲得する運動論として位置付けられることにある。キング牧師らによる公民権運動やガンジーによるインド独立運動など、地域住民が問題の根源を見つけ出し、コミュニティ組織を形成、運営し、生活改善や課題解決の運動へとつながったものもCOの一例といえることができる。

COは地域住民が自らの力に気づき、その力で課題を解決するために「媒介」することであり、「エンパワメント」が核心にある。同質的な集団の枠を超えて連帯を紡ぎ出し、民主主義を発展させていく技術として注目されている。

編集委員 竹内友章

ウォロ・バイダー、 いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバイダー
(1冊500円+送料350円)です。
お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで





いま若手起業家が熱い！これからの社会を担う35歳以下の社会起業家、その若さあふれる「実像」に迫ります。思いを行動に移した若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

U35

第29回

はまの まさゆき
一般社団法人えんがお 濱野 将行さん

一般社団法人えんがお

栃木県大田原市山の手2-14-3「コミュニティハウスみんなの家」内
電話 0287-33-9110

高齢者の孤立の予防と解消を目指して、2017年5月設立。空き家6軒を活用した地域サロン・学習スペース・地域食堂・障害者向けグループホームなどを運営している。子ども、若者、高齢者、障害者が分断なく関われる「ごちゃまぜのコミュニティ」に、年間延べ4000人が訪れている。

ごちゃまぜのコミュニティが、社会課題と向き合う力になる

ごちゃまぜの「コミュニティ」づくり

えんがおが空き家を活用して開設した地域サロン、学習スペース、地域食堂、障害者向けグループホームなどは、徒歩2分圏内に隣接している。地域サロンでは、高齢者と若者が食事を共にしたり、精神障害を抱えた人が地域の人たちとお茶を飲んだり、高校生・大学生と接したりするのが日常風景だ。「ごちゃまぜのコミュニティ」で、それぞれができることで互いに貢献し合う空間を生み出している。

つながりの希薄な高齢者は、困っても頼る相手がいないことが多い。電球が切れても交換できず、暗いまま過ごしている。食べたいものがあっても、買いに行けないから我慢する。寒いから布団を出したいけれど、出せないから寒いまま眠る。そういった我慢を強いられていることも少なくない。制度で対応できれば良いが、制度のはざまや境界の向こう側で孤立している場合に、行政と連携して訪問し、困りごとを有償で請け負うのもえんがおの特徴である。

始まりは、孤立しがちな高齢者に会話しと安心を届ける生活支援だった。4

年たった今でもそこは変わらないが、空き家を寄贈されたことで、グループホームやシェアハウス、共同キッチンなど多世代がゆるく関わりあひながら暮らしていける機能を持つ「地域包括ケアシステム」を実態として創り出した。「地域」と「必要としている人」と「支えてくれる人」を考えて、持続可能な仕組みで継続している。規模を拡大して関係者が増えても、世間話などを大切にして肩ひじ張らず、丁寧に関わり続けることもえんがおの魅力だ。

活動には、年間延べ1000人以上の若者が参加。若者の力を生かして「人とのつながりであらゆる社会課題と向き合う」ことをテーマに取り組んでいる。

無力感と大人への憧れが
原動力

とちぎユースサポーターズネットワーク代表の筆者が濱ちゃん（濱野将行さん）に出会ったのは、東日本大震災の支援活動だった。当会事務局長の古河大輔とともに、福島復興支援の現場で夜遅くまで語り合った10年前を覚えている。濱ちゃんは大学2年生だった。



上・左／「こんにちはえんがお」





「あの支援活動に参加したことが、社会活動に目覚めるきっかけでした。避難したおばあちゃんの話聞きながら、何もできない自分に途方もない無力感を感じた。その無力感と、社会問題に立ち向かい動く大人への憧れが原動力になったんです」

その後も在学中に海外ボランティア

や震災ボランティアなどを継続的に体験。卒業後、老人保健施設で作業療法士として働きながら、大学生と高齢者の交流活動を行う任意団体を立ち上げた。毎回楽しみに参加してくれる高齢者から、「ここでしたしか人と話をするのがなくて」と言われた時、「高齢者の孤立」を実感した。この現状を変えなければと心が震えた。その後、多くの先輩や仲間たちの支えがあり、2017年、えんがおを設立した。

「えんがおの取り組みは業界でも珍しく、制度では解決できなかったニーズを自費で解決していく取り組みが主でした。そのため理解されにくい部分も多く、各方面への説明にはかなり力を注ぎました。特に、活動してからトラブルなどを経てわかったのは、高齢者本人だけでなく、その周囲の専門職や家族の不安がクレームに発展すること。介入時に家族や周囲の専門職に電話で挨拶しておくことや、必要に応じて報告することの重要性を学びました」という。

こうして本人に加え、その周囲の人にも安心してもらうことで、満足度が上がり継続的な利用につながっていくことを学んだ。SNSなどを活用した現状や思いの発信も積極的に行い、地

域の現場や法人の取り組みに対して理解を得られるよう努めた。結果、応援してくれる人が増え、さまざまな資源が集まり事業が加速していった。

「景色のきれいな山」に登りたい

「現代の社会は、子ども・若者・高齢者・障害者など、すべてが分断されてしまっている」と濱ちゃんは言う。結果、不登校生は不登校生として生活しなければならず、認知症の人は認知症者としてしか生きられないケースは少なくない。「できないことがある」ことが、そのまま「できない人」になってしまう。

分断をなくし、すべての立場・世代の人が日常的に関わることで、互いに貢献し合う関係性を生み出す。自分の強みで誰かに貢献し、できないことは

助け合う「ごちゃまぜのコミュニティ」が、人とのつながりの力であらゆる社会課題と向き合う場になるのだ。

「高齢者が幸せじゃない社会は、景色のきれいな山に登るようなものだと思っています。一生懸命生きて、最期は孤立して終わる。それが当たり前になってしまえば、若者はつらいことを乗り越えて最期まで生きようとする活力をそがれ、未来に希望を抱けなくなってしまう。高齢化社会こそ、高齢者が幸せな社会である必要があると思います」

関わるすべての人の力を信じ、それができる役割を生み出すえんがお。孤立の対局にあるのは安心と貢献だ。1人の若者から始まった挑戦が、今日も、地域に笑顔を創り出している。NPO法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事 岩井 俊宗



濱野 将行さん

一般社団法人えんがお 代表理事

1991年生まれ、栃木県矢板市出身。作業療法士。大学卒業後、老人保健施設を経て2017年5月「一般社団法人えんがお」設立。とちぎユースサポーターズネットワークのソーシャルアクションアイデアコンテスト「IDEA NEXT」第5回グランプリ受賞。大田原市第一層協議体委員、同生涯活躍のまち推進協議会委員、栃木県協働アドバイザー、認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房理事などを務める。好きなものはビールとアウトドア。

「くらしごとと五右衛門」

京都の街なかから電車で30分ほどのところに、ずいぶん遠くへ来たようだ。無人駅の叡山電鉄三宅八幡で降りて5分足らず。古びた鉄扉と広い日本庭園をもつ五右衛門邸。近隣の大家さんから借り受けた築100年以上の古民家を拠点に、2014年からいろいろな市民主体のプロジェクトが活発に動いている。

里山や田畑を次世代につないでいきたいと活動する「くらしごとと五右衛門」では、台所に鎮座する大きな「おくどさん」(注)が主役の「かまどごはんの日」を定期開催。羽釜のごはん炊きや大鍋のおかず作りのあとは、おとなも子どもも一堂に会して夕食を楽しむ。Mealcooperate(人・助け合い)の意味をもつ「ゆいまーるめんこ」や、お金を介さず「価値」を交換する「力チカチ交換市」などの創案は、立ち上げメンバーのTAKKEちゃんたちだ。常連メンバーは30人ほど。家賃はイベント収益やカンパでまかなっている。

昼どき、メンバーが近くの竹林の作業から戻り、軒先のテーブルを囲んで食事を始めた。談笑する声は標準語っぽい。聞けば神奈川、広島など、京都出身者以外が半分以上。さまざまに偶然が引き寄せた顔ぶれだが、古くからの友人のような気の置けない会話が飛びかう。

「活動当初はどういった人たちなのか、怪しまれていたかもしれませんね……」。最初は近隣住民に好感をもたれていなかったらうと、TAKKEちゃんはふりかえる。遠巻きに見ていた住民との間に少しずつ交流が生まれ、来年からは京都府の助成金を得て、地域で大切に守られてきた水車小屋の再生にとりかかる。「地域の財産を任されるようになったのは、信頼された証拠なんだな……」と思いますね」

編集委員 村岡正司

くらしごとと五右衛門

京都市左京区上高野上高野植ノ町5

<https://www.facebook.com/goemon.kurashigoto/>

右／近くの竹林の整備から帰ってきたメンバーで昼ご飯
下／五右衛門邸と日本庭園



ほとんどの人がその目に映っていながら見えておらず、多くの人が知っているのに気づいていないヤングケアラー。問題が認識される前からその存在に気づいていた著者は、2016年に当事者である高校生や教員への調査を実施、過酷な実態を明らかにしてきた。

ケアの内容は家事、力仕事、さらには感情面のサポートに至るまで多岐にわたり、なかには自分の学業や対人関係に悪影響を及ぼすほど日常的に担っている子どもが確実にいる。自分の生活や健康を犠牲にするほど負荷が大きくても家族のケアから離れられず、

一方、ケアによって得られた貴重な経験や価値は理解も評価もされないことが多いという。

高齢化の進行等によりケアを要する人が増え、他方、近年広がった在宅福祉もある程度の家族ケアを要請する現実がある。そしてそれが特にケアの担い手が少なく、生活基盤に不安定さを抱えがちとなり親世帯でヤングケアラーが生まれやすい一因となっている。彼らへの学習支援や孤立を防ぐ「居場所づくり」といった直接的な支援はもちろん重要だが、ケアを要する人がいる家庭そのものを支える仕組みの充実が求められる。

手伝い感覚で行うことにより本人がケアを担っている意識が少ないことや、ケアへのかかわりを周囲に話さないことなどで、ヤングケアラーの存在は埋もれがちになってしまう。彼らがケアを担いながらも健康を保ち、人生設計を考え、自分の人生を歩めるようにするにはどうすればよいのか。それは、周囲にいる人々がその存在に「気づき」、実態や困難さを正しく理解し、経験や価値を認めていくことではないだろうか。

編集委員 阿部 太極

子ども介護者

ヤングケアラーの現実と社会の壁

濱島淑恵

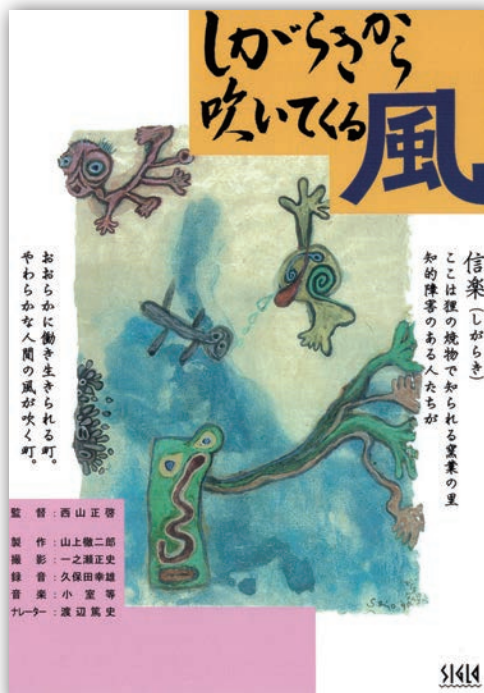
角川新書

子ども介護者

ヤングケアラーの現実と社会の壁

濱島 淑恵 著
KADOKAWA / 角川新書、
2021年9月
990円(税込)

今 回は旧作の『しがらきから吹いてくる風』(1990)を紹介したい。映画の舞台は焼き物の町として知られる滋賀県信楽町。知的な障害がある人たちが暮らす信楽青年寮の個性豊かな面々が登場する。ここでは生活するだけでなく、彼らが活躍できる「はたらく」場を見つけること、住民のひとりとしてその地域で暮らしていることをめざしている。ひとりひとり障害の程度が違い、こだわりや癖がある。職員は彼らの個性、適性を見ながら、地域の人たちに職場体験を依頼し、仕事につなげていく。同じことを繰り返して尋ねる彼らに、受け入れた町の人や青年寮の職員は時間をかけて付き合う。実に丁寧だ。この町で



今月の作品「しがらきから吹いてくる風」

焼き物を作るのは夫婦経営の小さな製陶所が多い。一つの職場で10年近く働く障害者もいて、彼らの姿は場になじんでいく。「最初はもう使いもんにならなかった」と言う雇い主の親父さん。それでも「(この人を) 終始預かっていくことが私の使命だと思っし」と言っ。この町で生きていく。この「場」で生きていく。孤独を抱え生き難さを伝えるニュースが多い昨今、障害を持つ人たちの姿を伸び伸びと描き、町全体で彼らを見守るやわらかな空気が印象的な作品だ。

バリアフリー映画を観る

この作品を選んだもう一つの理由が、バリアフリーに対応してい

制作：シグロ 監督：西山正啓
プロデューサー：山上徹二郎
1990年 | 1時間31分 | 日本
配給：パラブラ

パラブラ映画部ではバリアフリー作品を鑑賞することができます。



●今月の館主

おおがねく よしみ
大兼久 由美

沖縄県生まれ。柴田昌平監督作品のプロデュース、配給を行う。長編記録映画「ひめゆり」(2007)は公開以来毎年上映を続けている。近作「陶王子 2万の旅」は自主上映を募集中。お問い合わせ：042-497-6975



イラスト：杉浦 健

私の市民活動 Library (第47回)



13坪の本屋の奇跡 『闘い、そしてつながる』隆祥館書店の70年

木村 元彦 著
ころから、2019年11月
1870円 (税込)

人がつどい、魅力を感じる「場」の条件は何だろう。広い空間、小じられた内装……いや、それらは構成要素のひとつに過ぎず、重要なのは「人」の存在であることが、この本を読むと一層実感できる。

大阪市の中心部にあり、2019年に創業70年を迎えた隆祥館書店。父親のあとを継いで1994年より書店経営を担った長女の二村知子がこのノンフィクションの主人公だ。「本を商業主義の餌食にするな」という父親の言葉をポリシーに、わずか26.5畳ほどの独立系書店はいろいろな新風を吹かせていく。

知子は発行前に送られてくる新刊書の見本を徹底的に読み込み、発売と同時に常連客に薦める。原発、冤罪、人権、環境など、地味なノンフィクションでも常に3桁超えの売り上げ。ヘイト本は一切置かない。子ども向きの図鑑や参考書、コミックや雑誌も豊富。地域の常連が家族連れでひっきりなしに訪れる。

驚異的な売り上げ数によって出版社や著者とのつながりも深くなり、知子が聞き手となった「作家と読者のつどい」を、2011年より階上のホールで開催。19年9月までに242回を数える人気イベントに。売るための販促という

わけではなく、地域の人たちに隠れた名著を紹介し、共に知り、学ぼうというコンセプトで臨む場だ。さらに子育てを支援する「絵本と遊びで心をはぐくむ、ママと赤ちゃんの集い場」なども立ち上げ、好評を得る。

帯力バーに「理不尽な出版流通に声をあげた書店主の『闘い』を描く」とあるように、独立系書店を苦しめる日本の出版流通の現状をつぶさに描き出しているのも、この本のもうひとつの側面だ。知子の奮闘に、町の書店を応援せずにはいられない気持ちがかき起こる。

編集委員 村岡 正司